

現在、様々な場所でビオトープ、多自然型河川整備、エコロードといった生き物と共生する場づくりが行われている。生き物にやさしい技術といった言葉も多く聞かれる。ブームと言っても過言でない。しかし、本気で生き物の立場を考えている事例はとても少ないような気がする。つまり、見かけは何となく自然風であるが、具体的にどんな生き物のことを考えて設計したのか不明確であったり、そこには本来いない生物を目標にしたり持ち込んだり、その地域の生き物の現在の暮らしをあまり考えていなかったり、育成、管理に失敗してしまったりといった具合で「住民不在の政策」が多いのである。

では、なにがいけないのか、なにがそうさせているのであろうか。こ

れらの事業に関わっている多くの人々が、「よくわからない」、「生き物についてはシロートだから」と言う。しかし、私は、専門的知識が無いからうまくいかないのではなく、計画する人たちの「自然観」に問題があるような気がしてならないのである。自然を公園のオブジェと同じようにとらえている節がある。あそこの市でホテルの流れを作ったからうちにもほしい。こんな発想ではうまくいくわけがないと思う。

生き物についてはシロートだからといって、自分もヒトという生き物であることを忘れてる。つまり、「コツ」は、人間に対して政策を行う時と同じように考えればよいということだ。福祉を行うときには地域の人々の暮らしや意見を調べたり聞いたりして、どんな施設やどんな

サービスが必要か考える。生き物と共生する地域づくりも全く同じなのだ。地域の生き物たちが今どんな暮らしをしているのか、なにを望んでいるのかを良く調べる。今や昔、その地域で生き物たちが多く暮らしているすぐれた自然＝森や川、池や原っぱと言った空間がどんな構造をし、どんな生き物が暮らし、どこに分布しているのか。そして、現在、彼らの暮らしがどうなっているのかを調べる。そして、その優れた自然をモデルとして、現在の住民（生き物）に必要と考えられる施設やサービスを提供する。それが、ビオトープであったり、多自然型河川整備であったり、汚水を減らしたり、保全エリアを作ったりとかいう具体的な政策になる。生き物は公園のオブジェではなく、言葉を持たない住民なのだ。そして必要なことは彼らの暮らし、経済を考えた福祉政策なのだ。もちろん、彼らの家や食料を奪い、生活の場を汚しているのは人間なのだから。

(取締役副社長・逸見一郎)

生き物と共生する地域づくりのコツ

今更ながらの

「自然が先生!!」「自然に学べ!!」



その1.

目標の設定に注意

「ある生きもの」を目標にする場合

ひと昔前にそこにいた身近でアイドル的な生きものを設定するのが「グー」。



トンボやバッタなんか良い目標でありましょう...



おい! あま、オレも誰だと思っこのん? タガメだよ、タガメ、おめ、このん?

『タガメ』を復元しようなどという高望みは都市圏ではちょっと非現実的な目標になってしまう。

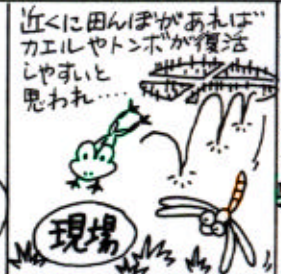
その地域の自然に合った目標も設定しよう



また「ある環境」を復元するという目標の場合は「ひと昔前の風景」も目標とするのがよいでしょう。



その2. ビオトープネットワークに注目!



現場



現場

こんなかんじで環境ネットワークのあるなしで、期待できる内容(生きもの)も変わってくる。



近くにある環境も上手に利用しましょう.....

その3. 環境の小構造を検討!



生きものにはそれぞれの生態に応じた小構造が必要だ。

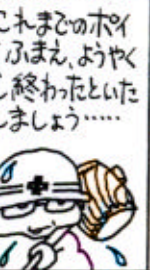
もともとあった良質な自然は生きもの同士のバランスがとれていたハズ。

ですから簡単に環境の復元なんて、木を植えたりあすい済むよ。というわけにはいかなひのチホ。

もとあったすぐれた自然をもっとよくしようとモデルとした小構造も復元することが必要だ(モザイク)



その4. 育成工事が大事!



しかし! それもせよ、トープ形成の出発点にすぎません。

今後、その作られた環境が、いかに変化していくか、正確に知り得るのは、神様しかいません。

ですから、復元状況のモニタリング、生物育成の管理、時には改修をする必要があるのです。



要するにアフターケアが大事ということです。

以上、セオトープ計画のポイントを整理してみました。

とここで.....

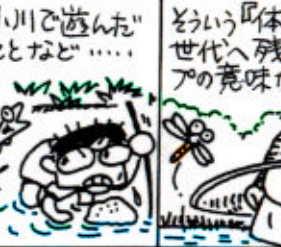


稀少種物の保全デス。

稀少種



小川で遊んだことなど.....



そういう「体験する風景」も次世代へ残しておくことがセオトープの意味なのだと思います。

では具合いびセオトープについて御いん居が説明します、と.....



おあとがよろしいようで.....



おしまい